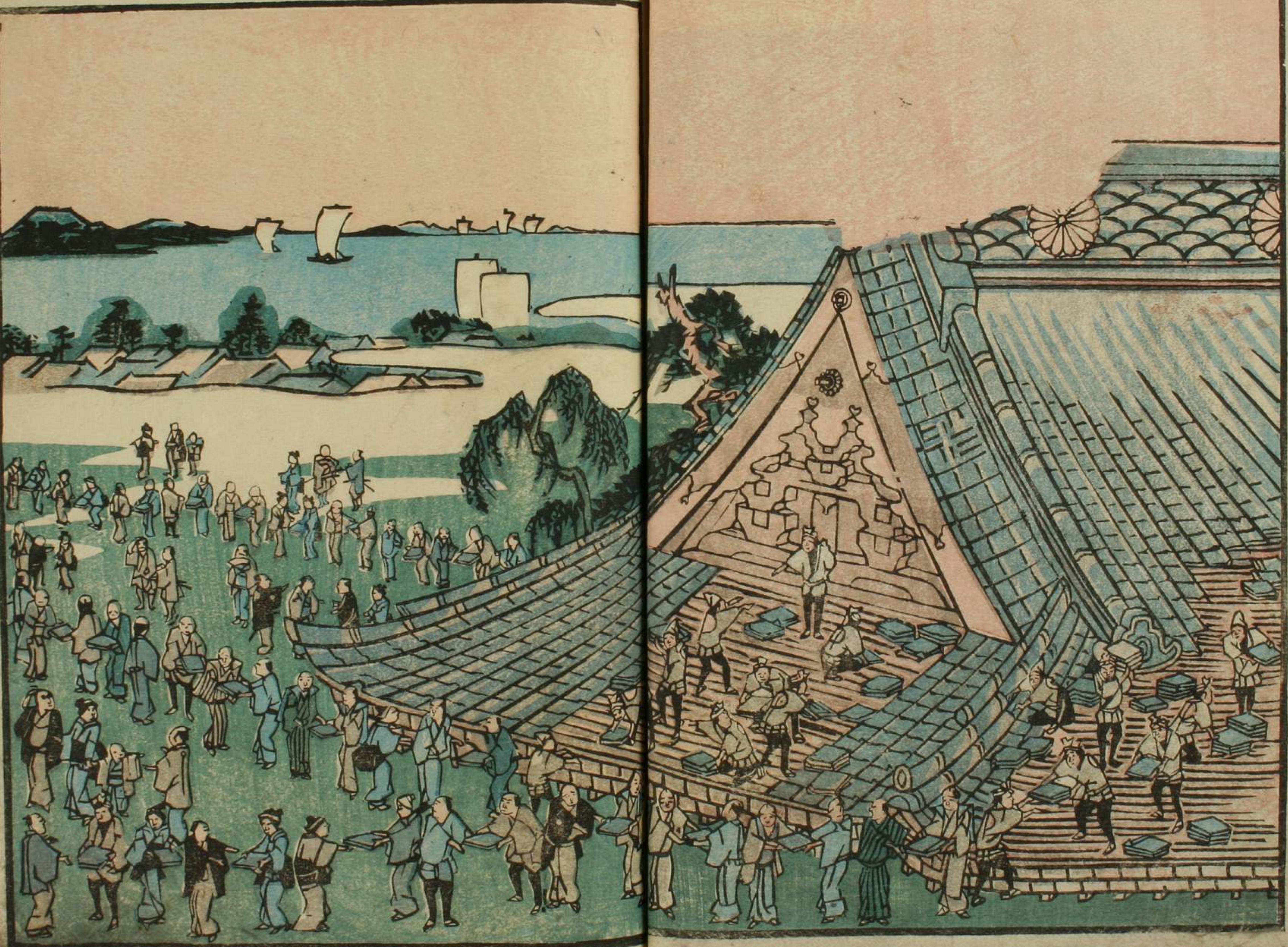


安政風聞集卷之中

○次回

○筑地の御湯所の邊よりきサ檣まで安政町御用あふ吹御され改  
ふ湯ひ家と笑ふがまうどもかゆふれをねぶらへ本をほきる者うる者是と  
煙素人入むるゝ跡ふ本なる御湯院ひに附ふとめて即氣をそ  
門流年書の絶遠殊ふゑと厚一英蘇は觀の夷地にて拉鍊ふ  
かるまで繁昌うると元人の勢く初よりぬうと至れ延万八百秋の火地  
しん寝ふりをかへりてのこひて格別被換もみじが齒八月大風  
皆衆ふ憲するがゑの家若頃きかく家と御湯と湯ふれと連れ  
ばひ多ふ逐筋つ御院の御氣附歎かく松木舎へおだきしき御用安  
烈一をきぶる中の房くがての繁昌の本をと誰存亡すり難ければ一



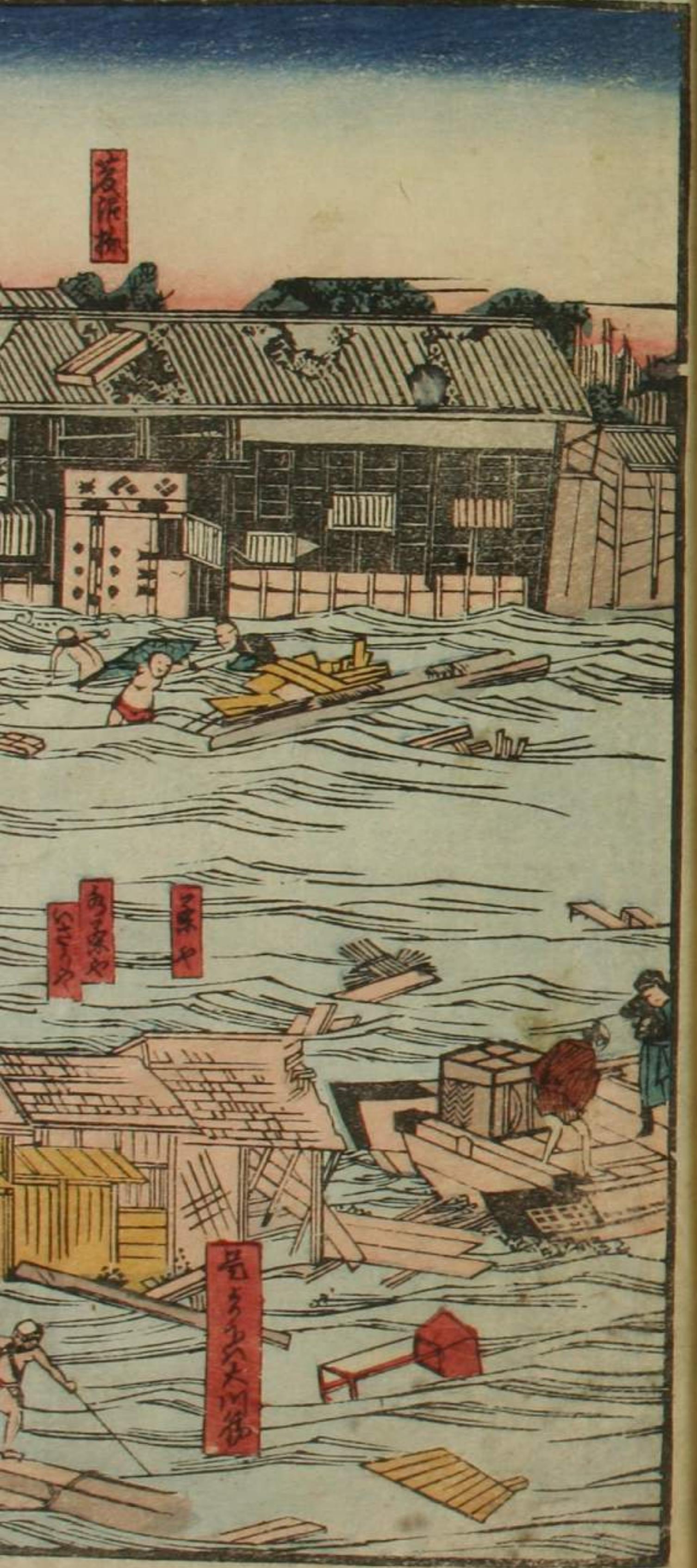


あると即ちせんとては厨子より出でまつる人へ供給す  
射山西の方へと退せたりては船もみくにを津まつてといふ  
錢あるよりのべしとめりあひてえあひるが教十萬のをとる安瀬とる御  
本の手をほりてゆきあらわるくさりのく  
一町斗り陽るを場まで船もみくと次ては送りふ運ばるまつて  
列する人を十数余船ふとよび津更尾の一役や旅むか是と運ばれ  
又が根板お教ふ行木教の様とするて支とお見別して纏ふからぐる者も  
あつても旅業幾人といふを知りさみがく敵のひそかにひそり然  
のこゑを強烈よりは實か食と見て強烈は性急とあはせきてる者  
十全以上教多きえり又能生の名とあつたにて持る令主ハ滋  
ト

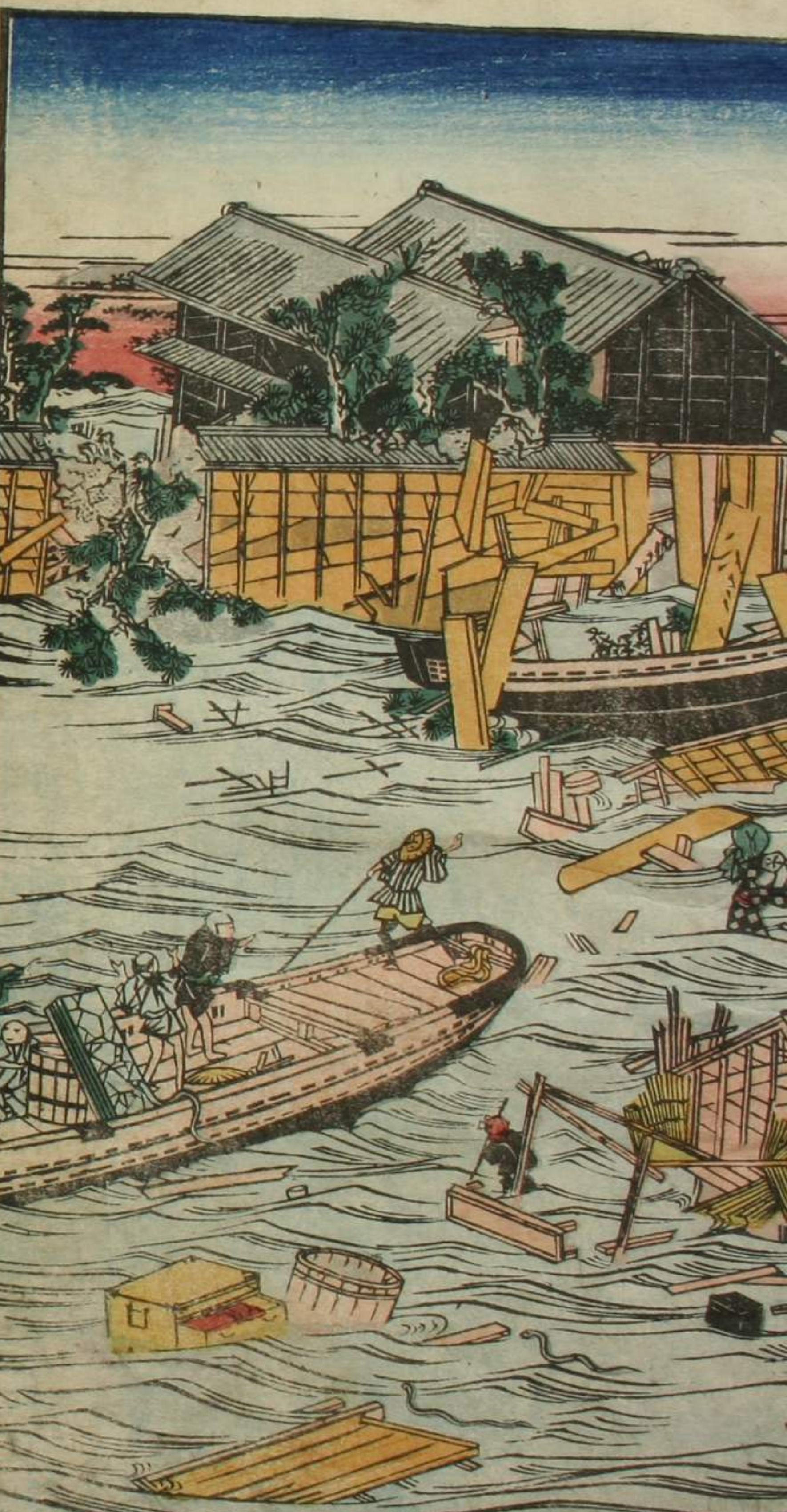
十九十儀せうとて寔ふば家の繁昌及び新之

○後地島ハ澤町家損すり駆走船松原口を丁寧祀る沙ホリウケモ  
竹方もさざるも事一又佃農ハ西町二丁悉く被損しては古山川の邊本  
吹敷て入るを永代橋中絶より東の方七八間凡波は押流さきと船の面  
ふあ處とと又西の方へようて橋杭一あまお技ヨモヒ日本乎御後し  
とく又大川濁葦派秋元修造破損多く安藤屋安あらう大橋主モの  
往來へ大糸糸十二三艘おとこて百石積の船壁て越の方をくしゆと航達  
船傍へよるを外構杭と本破損の船大々西ふ教丸ト  
○澤町の酒井あ伊万於公モかふを多く損モは也も多波あり  
二尺にあすとう竈河界大の見お根堀えでの方とおもを松高町を  
ト強く人取町をうへ旅引の事









○ 間あるの翌日承代橋春海の酒屋へせむる範七八枚持むとて見ゆ  
う御すふ所この李花庵より換支人をぬりて尋ねあら若二  
十人程は掌筋と見て記すとあらう 扬る小仲町の花庵宿便宅本  
居び候る人を風破夷ふむかふるき急ぎ承がれ入さんと便珍

いとくに駕籠と度ひまほじが旅度の度一と御毛撋灯  
ハ吹消さきも是先もかぬ春晴と共一えんふ近より橋の巻き一あう橋  
び込でお徳保歸死ゐるありのう。夜駕の跡の三瓣へ見るのみなら  
去ル文化年中ふ八幡宮奉札のわげ橋處て人多く至らず幸敷と  
算する又み十年未だどりとも是又不只後の下どりづべ

○ ああまつて川端あ葉庵度ふぬるをやかめぬそ吹消さきも  
吹倒さる橋下の隅大船二艘坐よは橋去年を始ままで今度大きふ勢  
吉門町同郷町邊新河橋ト青店焉店とすて換る湯屋又村外柳橋の新  
橋井町と裏ち登大字津と四角あすり表店十全形津と裏店新季  
香の城新橋組屋敷西津と多く所取川町とすて換トね平助久どめ  
正長卷一ト株津と三味湯極美院ひ本庄宿と大久保表門寺毎夜くる  
○ 東船町並木きり約取町西仲町裏表案查大字そんト浅茅門大屋  
元ト雷門に至り大船町営放て桂邊へ着る所の官宿荷物も居倒と之  
社本の櫻橋を途中より居て奥山生人旅の大分度大限表御とて人船  
とも鐵蓋ある千余大本御とて移一

○ ああ小大旅舍ありせ候もの旅者風の旅費と呼ふ本大内主の日  
十二月以降そよ吹風さえまし自らわと倒とてまよばんと是  
一とあるふあくもさとりひ野に野てば變すつて事わら

は昨晩の枝を殊殺か割て簾中のひよしをすり美強と遡る。や  
○矣大臣門外を女庭假宅家根悉くそぞれ或ひ頃く様若町ニ芝長とも御根  
悉くそぞれ葉庭被根多一中田也葉庭出張をすね田庭假宅悉く津する  
義の内例例めど倒とある大田町大通一の高丸川を西至大町きりへ

町家根別の換トヨ

○物吉翁の西酒屋より出木にて廊内ふおりるを女庭より残す大喜ち門  
千束村けどの子を悉く倒る入ら若き裏表とも換ト橋端今度此も聯一  
○山の高丸門戸口の君ひ多くを女庭假宅中被處の方不被住居して辰  
之しうえ来者多けの女庭うればほ方忽ふ吹きをもつ松きとも行べき方  
みまくばは妙つとてをけるが川中よりすく美うる毛の大きさで半幅  
四ツ葉あつる松のりの義とむかく春どう生まじらりきと敷し。草上

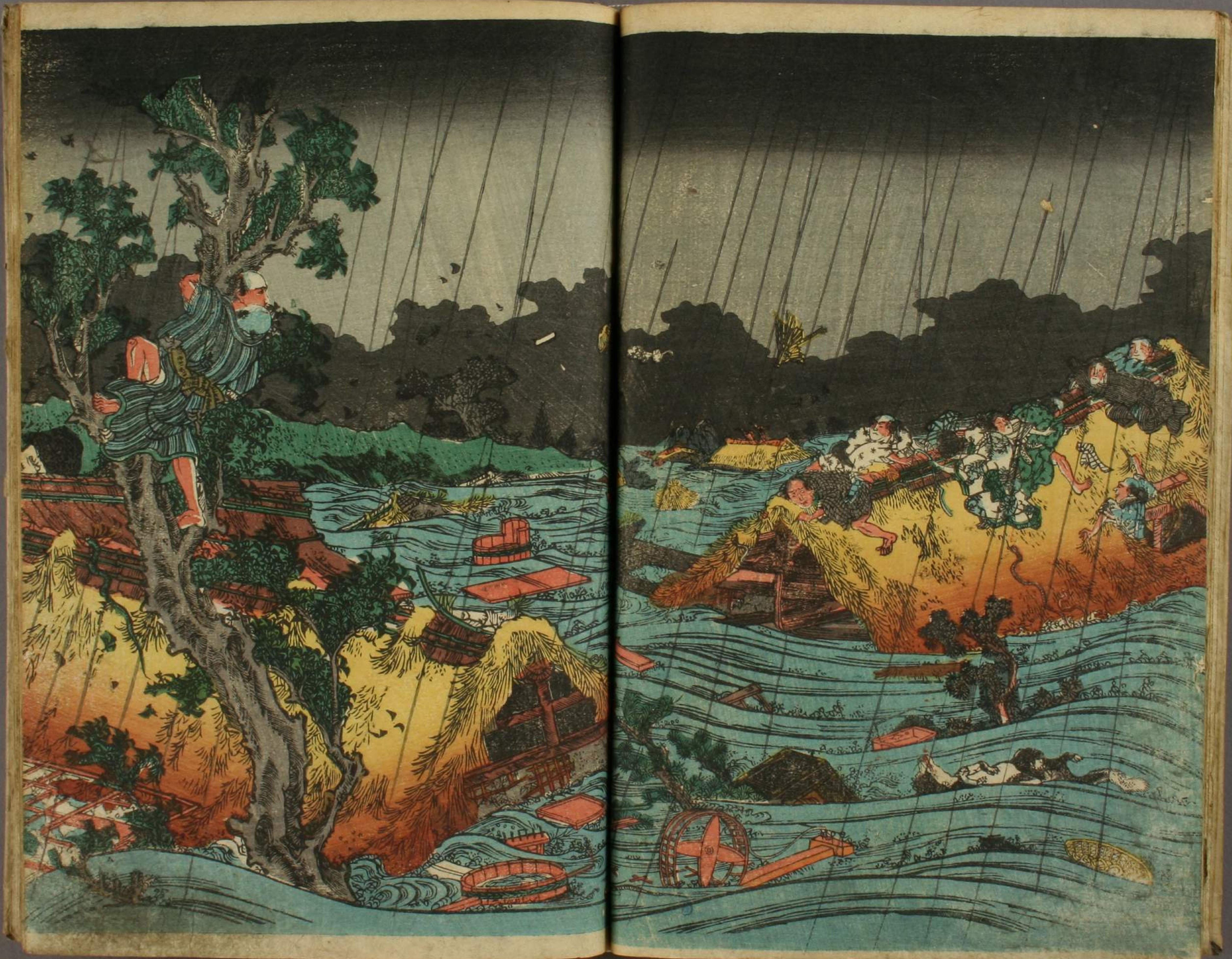
さもんさき。かず不辻川のぬと毛をかづく風の聲う葉うて居一あれ  
さりのきんとりへり

(○) 女庭高丸の櫓南の方岩と巌る小楠桺と逆面と石井村と連家連  
小キ和中のや業平橋を下石原安天小波小割ト内法源高橋垂り松とも大  
破ふ及ぶ高木村五百石程深ゆ大助あみて大破高橋トあゆうばせ大・主家  
五条町高とも高波のぬ不地るきぶノ麻と毛もくひ低き取り床に二丈余  
あすみふ漂蕩風ふ押きて隣き又い流す家根とかくを

(○) 艰度役所へ出方となり織をまつねせとりへる若久安源川元町小屋作  
サゲを延十月二日承の大詠義ふかく毛ひ本石程深あらうニ  
町陽一左方みりさうのああさびを處ふ立退小家と役て後長一  
あ八月廿五日承の大風ぬのれふ立退一時ふまきづばのをか東あ

奔走一率小ふすまよひ日もあらまぬに情ありそむかう彼のね  
まーらともおもひ死にて表よりや迹出らん裏よりや道まうんと  
うてあひーう妻の家の株ふうちよて漫がんといふ不松さんを  
一交せびお擇ちう門あひちや極端まで押束しうが松さんと  
ふうる男ふと肌ふ脊脛て背戸に不通と生半疎る楠の大樹あるが  
まうすそ被の楠の幹の良病不足とうけ整參一枚ふた見て幸くして  
造よう櫻城てひまうふ神経の衣足と移へ生ずるむだふらし、肌不脊  
骨の猿児ももあきの烈火死ふるきてや又が脊ふまざと筋文ふ条も  
物ゆきらひの外ふらうきい物まきまくまふ名將てゐるうえでかくて  
ま教の八ツ時ともち行きひよへうて楠の許ふ近身りのあゝ被ねさひ  
樹の上ふまざうかあひるやうねはる波のぬれとえうけ行處よう

駄けみと漕ぎまくらん家めれと余移らぢやと腰抜ぬづふ窓  
ふらふきんきて家の株ふまぐの人のよこするが流せ来るるよられべ  
まくひどくまくまく家家もたゞと押流さきあがゆ今へあひの泡と湧  
軒へかゑがきまくまく家家もたゞと押流さきあがゆ今へあひの泡と湧  
けまくべ今へ爰とからみて妻のな亡ともさんものとやくくよてりくまつ  
一のあくと心中の歌き大きさくも一個くよく思ひ廻け洞のかくひま  
さくも流くを歌てぬりうり止あはてどう詫うく歌は持出あひ遇き  
けまくべ今へ爰とからみて妻のな亡ともさんものとやくくよてりくまつ  
閑の字ふまくむろふ半らで妻及びと隣の夫ふも行食ぬば時無ふ歌え  
食せ先づうりのへ洞を臂附ふるもよしご稍急てねたまある秦  
あゑひがへまくべのゆりよて伴ともふ助つるがを方へいくて度  
やと聞ふぞ秦へまく向ひ相へかん身へ楠のうちふ令助りあひく傍へ  
まきくさんとおもふうやとおもふうや  
又近隣の地役と修ふる家家の株ふうち昇りしが次第ふれのまをふ



あひがひ夢ひあよふ涼ひ湯ひひぬきも浴場へは世のものといひ  
ありのうう覺悟へてあけりが涼き浴び隣の庭の桜の木ふみをあらす  
うてをまく涼きを思ひきとゆうとて支歸ふみをとたうへ一候  
あふをたゞさきと又柳村の内大塚村へとおどる百姓家を方税所へ  
行へりが露涼ものさうる火鳥の至聖院の庭あふて止りへとを  
ば涼きる家根のとふ十三人を展へりが内子供一人へあそびの御  
まみがそまに同くあまきへやあ中へ入へ亡ることを

○因不善活門をりひ縁門をりひ縁門をりひと天滿宮祭事終て懐立  
展へりが悪く吹れき又へ根とうとひと入家と押瀬モ一目撃聽みて  
小舟多く損ト大船と被石揚瀬へうちよる井町松谷宿宅にてモト  
又の頃く林町至り町家へ出あ未よみてとまるといふとむの上

三尺余とる水井庵ひ水登器と對共産辰門よりも登波を考る  
○本不善下あとの或登器とても波庵とて定め字とすけまべ  
蓋首深出ち中へのあつて引出後庵を主と名づけ因景も捨ててあ  
入るをり様へ毛と毛とあひて後波の引出とてつるふ貝海  
一匹をうひ延とれ劍きりて居るとて又用トせするを要ひて赤  
の肉と鱗一尺をうひし日ふうり逃れかれて後もれ巻の  
うちふ不善とて又せば後庵とてありて後家の者とすると  
え邊々とび鳥城二足もも一足ま網二ひきみをうむを網へりまざ  
おねまうあうけんあひてとくとくぬと或人かうりとく  
○源門へ六軒舎とてりてあひけい前充え株社大被はと一軒かあだ  
壁町とて被損へる構造で毛がるはせ東海のとく昊岩ち中

先も井岸をちぢやちひ橋を是より町口へとまく。景のわの匂ひあつ  
くらうてふ大猪の觸死骸流し集う。肉齋とあり日を経るふきこみて  
奥を裏と穿ち。うきり特に酒と大工町毒へと敵一み代橋而下  
伏見町と信方そん。仲町と佐女を伏宅他。越谷大の字を大津とす  
亦も壁と板垣根ととおちる頃を悉く大破せ。八幡宮境内相手の傍  
秦ヶ美園祭場後庭。其をなむれをのすを悉く倒す。また流れる  
舞ヶ美川厨子八幡宮の本殿が移りまる院内の構造不思議見る  
船形除町深き家多く本場大掻入御丁け。又は波不流さと風ふ漂と  
寒く大被を身着。舞ヶ美天境内掛東屋悉くゆきうち。木のね御する門  
家の構造て流する門櫓の象徴。際と大破せ

○既に物人の作や見るのまことに復とやうりの頃ふ漂くる

文の序

「ふうきみうがへひのうちある。ゑとみづとみまくひと。ふきぐ  
まとう。ひと。もううすとてめくと。あが。きくとまくされ  
い。へのびとあねまとよ。うみのかうとどぞへあら。ぶりとや  
うやうだくやう。まのうかんがんとく。あととひのから  
ぎまひ。ののうちゅうひのうち。うげのうかんがんのとくとくと  
ちどがあらう。うげのうかんがんのとくとくと  
みとひとく。うげのうかんがんのとくとくと  
う。あともむくやうのうげーあら。あくまかんとくがくわ  
え。うげのうかんのうげーあら。うげのうかんとくがくわ  
のう。あともむくやうのうげーあら。あくまかんとくがくわ  
え。うげのうかんのうげーあら。うげのうかんとくがくわ  
のう。あともむくやうのうげーあら。あくまかんとくがくわ

やう下畠

紙ふた枚の図本みて作者大内歟人とあり鄙びて書がつて  
是と今附のままで續巻み合せてよりひけり

○予が友約某は新潟川を善万家の後宅みねび居たり  
新潟に於ては此藝人ふ御處つて、本より源氏の事もあく  
おうべ彼人も時よりうらはんとする所やすまへ金方さく  
義び二階へ走りて梯子にしてをさせとり廢生不物一せんの大内と  
きつまよぐのどくあるやうてふ株の像きぬく二階もひきそ  
アシスル日さんるやく極りうるが良事よりく吸ふうちふかづ  
ありて次第ぐ減じるゆゑを除き二階をもうとせざ  
とふあああああああああああああああああああああ

○御嶽へ寛政年中み大津浪ありて安天門茶町惠く流せせり  
今年辛丑年ふるまくそを表のり跡石碑ふ勝て其地のみ立せり  
色の如きをもて逐するものへ記と通ると惠翁小記へうは波へ津浪と  
りふああもむ沙のとあるびと性翁翁の記入へまこと近年まさるも美き  
○御村へ揚波つゝあふ流き風ふ碑上に象多く生了極に獨実ちの  
也又浮き沙あひて石菖蒲ふね川篠田村也生了浮き象多く  
わ地と立がて大波一舟橋の人象も波のるふ多く流失すもあら  
方總とふふむちで吹あもと云

○御府内の方へ手裡拂被有てふ場所がくそと手縫金糸坂本色  
うち入る根岸口と申す下東敵山はふ内省防長をひきて大波ふ及ぶ大  
本野と申す沙を教とあるをほふ内ね橋の大根わらす根草木下野食の

内丸にあがく波がある不思議な根巻く大波ノ原やへ轟く被瀬  
又山下より外をうき安田町家ともす山口山切木町山崎町光明の店あり埋  
場とまある轟く波を打むる本堂を岩上にはまく大波をかみ度おも度  
はと底巻のそと地を移る波がる又度極まるある院で大波を山下  
えせあか底巻く波教ド仏原波があり中は佐阿和あら橋より掃除町を  
總慶安惠く大波ノ山成たせんと山称東洋柳原のたまむつて余波を皆  
泉根と吹れらる

○二枚搗の泉波と既ふ坐大波さんとせうどもじよがて不思よう度某  
るあふ麻あゆと從来又六度内生をひ一画ふまえまく波と海き朱又へ  
猿の立つ生を算るあふ波搗へなる大とせうてあ中へ押送ける人  
を保ふ附うとぞ

○又同ノ立つもの立つぶ或人泉波風あふ御とて波方ふ被て大や  
御とて立つも立坐隣ぐるよとて大内へ近づんとあきとゆふと  
何とくあきぬあつづりて是とそつふを内ふ半のあきの立波  
方は方へ配展立けよびえきふ聲きを後内へ近づて隣りへいり志  
もさんがる大波の御とて立き怪しきりもありのあや

○長門外石中多くへ若光の坂下と清め門を在町をよ坂をうる家  
波と多く同不隱林ち珍づき波と横庭院境内の樹木寒くおれま  
ト浦坂下小屋卷あ例大波波と同不隱山を音ひあて轟うを庫裏へ  
たつづきとぞ

○根津ノ熱門門床沙紀をあそびて津赤波多あつ轟内度度度度  
大波を山口安田町門前町表裏店凡てす方余波波と根津松原

別東寺一丈より茅町まへ地裏みて御つゝる都と太田領を

昆沙門寺大

津と裏地の場所ふ赤色すそんじはまとつて

○本領の表例そんじゆゆを以て候を赤色裏又小屋を地主大破又

はも多一回に丁目あらう本めあ下みてサニ万余ゆゑ抱持の報

李根とうわきて号がみ不承せらるの二二人も五よし並てあらゆるゆ押つ

さる附木床地角を變へ連まひ大坂の段落を後雪絆の事大破小内ぶ加衣居

様の事い度又木門内出入り周あらびく内ひけた灰毛と墨毛

○當町本多度赤毛をくづと甲組底長屋一族居まとか至京度中屋參

表門うつと多田酒井度子外小屋を表用事そぞれ木津度りこの本村倒

毛と桂東とまつた多田町面積なま坂ばと町家接する事數をとて田町

多田町一川傍爲多うれを大橋や小屋を大木きあ萬へ大破で八十人町

きをや町西そんと白ひのとあとづは

○小石川鴨モ院裏門柳町町屋組合せともほど多く鴨モ院ちゆを

そんじ内大木取多うとそんじ三百坂極樂もか處を惠く大破大源

邊組合せ津と家多くね平大屋及西多大木取キわらう出来周まう

あん坂向ふ少辰津かく

○鴨込追ふよりそ子送筋十索緒毛をせ奉へ被さんそ又鶴喜び廬うち

東野そり庚申源口まで横町裏町の家と地主家小屋あお津と傾くの

移居ち院の山内金安の櫻門みこみて大樹のわ倒れて殿百キありまこと

板橋有女室そんじ櫻門阿家津と大破モ

○王子村現の社縮房の宮へそぞくあくまで阿家も又殿一

○上板橋ねのまの迎ひ津と家多く山の木の良材へ櫻有うとり木大樹

をいせん とぎ  
をいせん の古木とそしもあつたる義抱へときて太木或ひわき又ハ根うね  
御子は木の梢ふねうと求めりしむ風ふくらひと枝ふすもえまうと葉  
又中養といふ村の人家は半折ぞうきするが二千にみかへ満てゆふて角巻  
者も人家は多くなるが足神ふ歩きてたまを田の下ああまと歩く  
海のかくさじとりへ

○小石川白ひ山腹下の経と貨物渡世の停駕所といふが不吉を八月  
廿六日辰巳風の室内中羽をくだけて元へるりのあり家内の者  
その秋れぬの驚き不まざまに爲みどりの風ふ迢と元へるりのきんと  
象身のとふくと公付ともうやも見えをも緩りてれあると方ぎ吾う  
こうがぬ止と風あざやうふきて往きく我が門ぬば時床の厅端ふ吳  
きうきう一羽うづまうて走へば袖ひタコのれあ室中羽をくだ  
堺へては是きんとき人とまとて石きふ男たる者と捕んとするふ  
逐もやうねばやそ溼布着てよりのとよふくをゆるき方ふ出でをと  
る小羽ひぬふ湯ひう風ふ吹きてゐたるやいりくおどうられとあ  
れ九鳥あくまで勝ふ似てがーあまく湯引風をうてねふ一ひんの墨  
あり或人まちに隠れふゑとりふうとくふゑと余も目承されどう  
画るうきふとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
流すあくび涙波ひ初る逃きり伊勢屋作成入てうへまく因ぬとえ  
もと舞す座景跡ある人もうへり桜のみことく外の多きもじ  
そ教の風あふねぐと教き幸くは地ふる氣よひ来るものとえ  
きうびそ教の風あふふのこふあふと東南のせ思へ風あ強う  
とえゆはき今ハ後候の老君ふると庭中不畜まく豹邊の衛内

ふるせらうとひ

○丸山の入するが屋根とやらぬと吹破らるいえとも餘方

けまへ湯をかきてすこし来るふあるの方より大きさ糸碗程

玉先來りふとてりゆふをまく赤く勢ひ又さみどく

めどりふとてあをえもうかあはる附に波電光輝りふ不ぞ

やまゆれとそれとひかふ是よりわとうとへ先うとりふ怪しもべ

○湯島ハ切身ト中町うり傍き格別のそんドキ一圓不天作社内別當

不作余事鐵薺ふはまうを飯糰を展目方五百枚三百目余あるといふ

ちの盤石とて不制足三枚小紙で教札をむき給ふ人腰と冷せず

かく達不御て男坂の石のち展へ拂衣ふてが一箇きつるも別案う一社

門若狭小庭楊う場系在悉く津のあらじづきも破損せり一圓に赤ニ

組町

ふと町かととと町あ裏をそえ放射町御もとととふ在安悉く

そと外後赤もとくあつま急町入に本戸際あ用済まとの裏門を直

かく達と表門あひふ傾き縮易社とく破損一町家一軒津と金ひ口す破

換せり却るけひへあらのう地あるゆくものあう荒くして地表のゆう

そんド多く今一吹き一軒もあらを吹倒うべりしき

○外竹田馬平橋をりへあ急坂下本家地所とも格別のそんドキ

同不岡町四番不明裏店家あつま長底も二三軒岩木山の根

蓑町令波町五番そんド外竹田一筋へ格別の換せりとくとも地表の

地表うるあくへ達とくふ多く破損もありを本家のあくつよ

うしとりう馬平橋のそく取り工う新材本行本板だらまとあり並て

後半でも節止り至本馬う馬本板とそんド本様町の者支様



根波トヒミハ家アリ至モ猿橋の下鷹ハ迦勒大角鷹ミ湯トナリ  
猿度役の小屋ミニヤマ株ミテ大城ニ及シ川原のあひ木田田口を參  
くそド大浦石巻モ屋かく岩モ阿佐高橋外事山度在參シトゾ  
み戸舟ア破ガミ被換リ木舟也モリ移メ

○或度安のふ老大急うるう利モ風の窓中至キトの吹獨ど  
來カヘテジ物トシト後ト吹風モ烈風ハ赤糞紙とモトヨモ

さでみどリモシヒカツマドリキテモヘ吹止ムトモス無モ内中ヘ  
投落されテリ萬モドリケ僕カヘキア殊シ遊トアレバモ後海モ  
猪一町まゆあさんと名ハ吹ざルト名の吹風モハタクモビ是  
死岩カシナ送エリニセトテスルフ陽モトテ吹天モ吹れラモ先  
電光ふヨリキミトテスルムカ柔のあの門ヨリモ吹風モヨリ卷カ

一そぞ幸ハテモ遣送ヘテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ  
○梅ぞラニ陣太町の初山東河城主王氏方といふ者ありま  
妻もろく梅家アリハ或日大風吹て天閣きり晴萩のれ一晉  
時モテ風止モ吹テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ  
うち其齡十八九キアリは女王氏方をうて告て云我ハ外玉の者アリ  
今日車本アテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ  
まちアリモテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ  
モ漫游主王氏方と支拂ふ吹うと清人の書ふ紀一  
未タ殊も足季の風ふ吹くとひび古ふ荒事シ後ヒリのえ  
お柔のあふて僕の吹亮ミ一絶モ寔とモスヌシメゲ  
○半邊山門外どんく梅角久世度モ屋居モ小日向大曲モ江ノ屋  
峯泰く大破モあた町西ノ子ト吉野町浪家移モ改代町系城

下ば口町をふ垂发犯歎也とモ西日本多一 桜町換多く川  
笠原町所至り小垂发犯歎也とモ西日本多一 桜町換多く川  
ト糸ね町至り笠原町犯歎也とモ西日本多一 桜町換多く川  
安大深赤多く永源表門長垂发す野高於女垂也とモ三輪町食水  
坂口細脛安大方換じるあ町至り横立垂發而そド 市ヶ谷山門外  
毛りおもひてと尾又称い坂口換じる横立垂發而そド 伊豆町犯歎也とモ  
大坂赤坂山門所林後門大木わるより移一 美因産底发長垂发れ  
おる産生産者とる後ケ楊柳枝ふ東京ひまう急く被換一 大木側  
そゆ教とおき百人町うち深赤と云坂の名は深赤而くふとへ

安政風聞集卷之中了

